

ハロルド・ラスキと第二次労働党政府

小笠原 欣 幸

はじめに

1929年5月の総選挙において、イギリス労働党は、結成29年にして初めて第一党の座に進出し、マクドナルドを首班とする第二次労働党政府が組織された。ハロルド・ラスキ（1893—1950）は、政治学者として、労働党員として、この労働党政府に強い関心を払い、また逆に、それから強い影響を受けるのである。本稿では、ラスキが労働党政府に期待したものが何であったのか、そしてその期待がどのように裏切られていくのかを検討し、労働党政府の経験がラスキの思想の展開にどのような影響を与えたのかを明らかにしたい。

1. 労働党政府への期待

最初に、労働党政府が成立する直前、ラスキが政治に何を求めていたのかを、彼が1929年3月に発表した論文「1929年のイギリス」を手掛りに考察したい。ここでラスキが問題にしているのは、150万人にも達する失業者の存在である。ラスキは、政府の無為無策を強く非難し、彼自身の解決への見通しを次のように示している。「[イギリス産業の] 出口は、労働組合との協力の中で行われる慎重な合理化政策にある。……なぜなら、イギリスのトレード・ユニオンイズムは、新しい精神によって特徴づけられているからである。……労働組合は合理化が必然的なものであることを理解し、労働組合の防衛は、それ自身の合意と監視をもって実行される[イギリス経済の] 再建にあることを知っている。⁽¹⁾」すなわち、この時点においてラスキは、産業の国有化を主張しながらも、1926年のゼネスト後に生じた労資協調路線を積極的に支持していたのであ

る。一方、国際関係については、アメリカの孤立傾向や、ジュネーヴの海軍軍縮会議の失敗などで必ずしも良好とは言えなかった英米関係、そしてヨーロッパの平和維持を、国際連盟と自由貿易の線に沿って解決していくことを主張している。

ラスキが政治に求めていたこと、とりわけ労働党が政権についた時に取り組むことを期待していたことは、要約すると、すでに勝ち取られた政治的民主主義を用いて、社会主義、すなわち、経済的、社会的な民主主義を達成する、ということである。この論文に関する限り、労働党が政権についても、資本家勢力の抵抗で社会主義政策が実行できなくなるとか、政権を覆されてしまうかもしれない、という危惧の念は何ら表明されていない。この論文は、労働党が選挙に勝てば自動的に改革が進むと考えていた「漸進主義者」の論文なのである。1929年、ラスキは『近代国家における自由』を執筆するのであるが、その中で彼は、人間の理性を全面的に信頼する人間像を描いている。ラスキは、人間の理性に力を与えることによって、諸問題の平和的解決、そして、漸進的な社会主義の実現を期待し得たのである。

1929年5月の総選挙で、保守、労働、自由の3党は、ほとんど同数の候補者をたて、それぞれ明確な首相候補に率いられていた。保守党は現職首相ボールドウィンの「安全第一」を、自由党は元首相ロイド・ジョージの選挙綱領『我我は失業を征服できる』を掲げ、そして労働党は前首相マクドナルドの国民的名声と、R. H. トーニーが起草した選挙綱領『労働党と国民』をもって選挙戦に臨んだ。選挙戦の最中、ラスキは、彼の最も親しい友人の一人であるアメリカのホームズ判事にあてた手紙の中で、ラスキ自身が総選挙に熱中していること、そして、労働党の善戦にもかかわらず、保守党の過半数獲得が予想されると書いている⁽²⁾。

5月30日の投票結果は、ラスキの予想に反して、労働党が288議席を獲得して第一党の座に進出したが、過半数には達しなかった⁽³⁾。それでもマクドナルドは政権の担当を受け入れ、1924年に続いて第二次マクドナルド内閣が発足した。内閣の構成は、圧倒的に党内右派が優勢であった。ジョージ・ランズベリがただ一人、「左派のスポークスマン」として公共事業局長官の地位につき入

闊した。そのランズベリに、ラスキは、「あなたがいなかったとしたら、人生はもっとみずぼらしいものだったでしょう。私たち〔ラスキ夫妻〕は、新しい諸計画が、あなたの洞察力と人間性の助力を受けることをうれしく思います」⁽⁴⁾と祝福の言葉を送っている。組閣に際してラスキは、マクドナルドと頻繁に接触を保ち、相談を受けていたようである。この頃ホームズ判事にあてた手紙には、「LSE の私の同僚の二人が役職につきました。そのうちの一人⁽⁵⁾は、少なくとも、全く二流のポストから外務政務次官の地位に昇格させることができました」⁽⁶⁾という記述があり、ラスキが政府人事にも影響力を行使したことを示している。

マクドナルド内閣に対するラスキの大きな期待、高い評価は、しばらくの間持続する。1929年10月に発表された論文「イギリス労働党の新しい試練」においてラスキは、「能力と性格においてマクドナルド内閣は、強力な組合せである。それは、外交政策においては明確に平和主義の立場にあり、内政においてはラジカルな実験を進んで行うことができる」⁽⁷⁾と述べている。マクドナルドを初め、外相のアーサー・ヘンダソン、蔵相のフィリップ・スノードンらの個人的手腕も、それぞれ高く評価されている。ラスキがこの労働党内閣を評価する一つの理由は、「内閣の重要な地位を占める貴族が一人もいない」ことであった。しかし、この評価は、やがて撤回されることになる。また、マクドナルド個人に対する信頼も、やはりしばらくの間継続する。12月28日付のホームズ判事あての手紙に見られる次のような記述は、その一例である。

マクドナルドは、彼が非常に偉大な人物であるということを示すようになりました。彼を批評する人たちは、皆、彼の思想の特性を誤解していると思います。彼は、公益以外には何も関心がありません⁽⁸⁾。

2. ■ 政治への関与

内閣成立後のホームズ判事あての手紙には、ラスキが、マクドナルド、ヘンダソンらと頻繁な接触を保ち、特定の問題については、メモランダムやアドバイスの形で内閣の政策決定過程に影響を及ぼしたことが記されている。それらは、ストライキの調停から外交問題まで幅広い分野にわたっている。例えば、

英米関係では、1929年10月に訪米してフーバー大統領と会談することになっていたマクドナルドの個人的アドバイザーの役を果たしている。8月2日付の手紙には、「内密の話であることは言うまでもありませんが、私はアメリカ問題で首相と共に仕事をしています。これは大変興味深く、私は成功への大きな希望を持っています」と記され、首相がラスキの助言に同意したことが書かれている。この手紙でラスキは、首相が、彼が訪米する際ラスキの同行を示唆したことに言及し、それに対して次のように答えたと書いている。

私は首相に、私の一つの願望は、政府との公式の関係をほのめかすような事を避けることです、と言いました。これまでもそうであったように、私は、助言が必要な時はいつでもそうします。そして、マクドナルド自身も言ったように、彼から常に情報を得て、責任とか従属なしに批判できる人間がいるということは有益なことなのです⁽⁹⁾。

ラスキが、政治の表舞台で活躍することより、ブレーンとして、あるいは「黒幕」として舞台裏に留まることを望んでいたことが、ここから読み取れる。

ラスキが政界入りを要請されたのは、一度や二度のことではない。1920年代のホームズ判事あての手紙には、議員への立候補要請を断るのに苦労している、という話が何度も出てくる。また、シルビア・パンカーストがラスキ夫人にあてた手紙には、「第一次マクドナルド内閣の登場に先だつ総選挙で、ヘンダソン〔当時党書記長〕がラスキに、クレイクロスの選挙区から立候補することを頻りに勧めました。この議席は、その選挙で労働党によって6千票の差で勝ち取られました」⁽¹⁰⁾とある。今回の第二次労働党政府の発足に際しては、マクドナルドから、貴族院議員になるようにとの要請も受けている。それにもかかわらず、あくまでも大学に留っていようというラスキの心境は、1929年12月9日付の手紙に見ることができる。

LSE で楽しい見ものがありました。私たちの来賓は、下級大臣になった二人の同僚でした。若い方〔外務次官のドールトン〕は、そのことを鼻にかけて、「ヨーロッパの平和維持に参加した後、小じんまりとした学究生活に戻る事がどれほど難しいか」ということから始めて、20分間そういう気分で全く敞かに話を続けました。私は LSE の祝杯に答えなければな

らず、こう言いました。我々教授連中は、鷲を前にしては虫にすぎないことをもちろん知っている。しかし我々は、鷲の鳥瞰では見えない社会組織の生成物が、時折つつましい虫によって知覚されるということを感じている。スピノザとかヘーゲルといった、政治的手腕があるなどと自惚れることのなかった人々が結局は名声の名簿に載る人物として記憶されることになったのである⁽¹¹⁾。

ラスキのマクドナルド内閣への関与の中で特筆されるべきことは、パレスチナ問題である。バルフォア宣言以来パレスチナでは、ユダヤ人とアラブ人との間にトラブルが発生していたが、1929年8月、暴動が起こり、植民地相のパスフィールド〔シドニー・ウェップ〕は、1930年10月、ユダヤ人の移住を実質的に中止すべきであるとする政府白書を発表した。「シオニストは騒動を起こし、気の毒にもパスフィールドは、ハマン以来ユダヤ民族の最悪の敵として嘲笑的になった。」⁽¹²⁾ この問題へのラスキの関与は、パレスチナのユダヤ人機関の責任者ロッカーがラスキ夫人にあてた手紙に以下のように要約されている。

イギリスとユダヤ人との関係に危機が生じた時、個人的な介入によって、とりわけ、外務大臣アーサー・ヘンダソンと共に特別の内閣委員会の設立に尽力したのはラスキでした。ヘンダソンを議長とするこの委員会は、最終的にはマクドナルドからワイツマン博士への手紙という形で、イギリス政府とユダヤ人機関との間の合意を生み出したのです⁽¹³⁾。

この合意が成立する直前、ラスキはヘンダソン外相に、「親愛なる『アーサーおじさん』』という挨拶で始まる次のような手紙を送っている。

今日ワイツマンと話し合いました。彼の立場に照らしてみれば、来週中にも白書に関する委員会の会合を締め括ることが、最も急を要すると思われます。……来週の月曜日、あるいは今週の金曜日か土曜日にお会いする時間を取っていただけないでしょうか。残っている問題は、すべて2時間以内に片付くと思います⁽¹⁴⁾。

こうして、1931年2月14日、マクドナルドの声明が発表され、白書のユダヤ人に対する厳しさは和らげられた。だが、この事は、問題を先送りにしたにすぎなかった。歴史家テイラーは、この問題を別の観点から、以下のように論じ

ている。

それでもパスフィールドは、困った発見をした。知らずに彼は、イギリス労働党の基本的哲学、事実ほとんどすべてのイギリス人の基本的哲学が、全く意味をなさないような問題に行きあたった。パレスチナには、アラブ人とユダヤ人とのあいだに和解できない衝突が存在したのであり、利害の共通性——両国民がただ誤謬によって認めることができずにいる利害の共通性——などは存在しなかったのである⁽¹⁵⁾。

これは、ラスキにも当てはまる事かもしれない。1930年10月に白書が発表されてから、翌31年2月マクドナルドの声明までの間、ラスキはホームズ判事への手紙で、毎回のように、調停の難しさを嘆き、当事者の強情さを貶し、人間への信頼すら揺らいでしまいかねないことを告白しているのである。以下の引用はその一例である。

これは、なんと恐ろしい仕事でしょうか。ウェッブの学者ぶった強情さといまいき、フェリックスとブランダイス⁽¹⁶⁾の頑なさ、当地のシオニストの熱狂的な憤激。私は、何か役に立つことをしたのかどうかわかりません。毎日の終わりに、人間性は、相互理解が可能なのだろうかと思いつつながら、疲れてベッドにもぐり込むのです⁽¹⁷⁾。

ラスキは、インド独立問題にも関与し、円卓会議の準備等で大法官サンキーの仕事を援助したのであるが、そこでもやはり、同じような困難にぶつかっている。ストライキの調停にしてもそうである。解決の著しく困難な現実の政治に関与することによって、ラスキは、人間の理性への全面的信頼を基礎とする彼の漸進主義擁護論を再検討せざるを得なくなるのである。

3. 労働党政府の崩壊

マクドナルド内閣に対するラスキの評価が高かったことは、先に見たとおりであるが、内閣が、ラスキの期待していることを成し得ないでいることが、次第に明らかになってくる。内閣が成立してから約1年後の1930年7月、ラスキは「貴族は未だにイギリスの支配階級である」と題する論文で、労働党政府の困難の本質を分析している。ここで問題にされているのは、労働党が政権につ

いても、社会の重要な部分は、イートンやハローのパブリック・スクールを経て、オックスフォードやケンブリッジを卒業した者によって占められている、という旧体制温存の社会構造である。「イギリスは、言葉の狭い意味で政治的民主主義になった。……すべての成人の市民は投票権を持ち、労働者が総理大臣になるのに何の障害もない。しかし、政治的民主主義は社会的民主主義とは同じものではないのだ。」⁽¹⁸⁾ そもそも保守党には労働者階級出身の議員は一人もいないし、労働党内にしても、貴族出身の議員は、労働者階級出身の議員に比べて昇進がはるかに速いのである。官界、司法界では、労働者階級出身の者は見当らないし、経済界も同じである。「貴族階級は、外面的特権は放棄したが、その社会的威信を保持し強めさえているのである。」⁽¹⁹⁾ こうした人々は、通常社会主義の理念には共鳴しない。それゆえ、労働党は、社会主義政策を推進することが著しく困難になるのである。「商業界、産業界に関する限り、労働党が政権につくことは、近い将来に社会主義の原則を適用する試みとなりそうにない。……財政立法によって劇的な変化を試みるとシティからの厳しい反対にあい、それはイギリスの海外信用取引に損害を与えることになろう。」⁽²⁰⁾ この記述は、1年後の政治危機の本質をラスキが予見していたかのように思わせる。

1931年以降、ラスキは、政治的民主主義によって社会的な民主主義を達成できるかどうかという疑念を議論の中心に据えることになるのだが、それはこの第二労働党政府の経験から引き出されているようである。もしも労働党政府が、少数内閣にもかかわらず敢然と難局に立ち向かっていれば、ラスキのその後の議論も違った方向に展開していたかもしれない。しかし、事実それは逆で、ラスキにその不甲斐なさを感じさせるようなことばかりであった。「プロレタリアートの支持者よりも、上流社会特にロンドンデリー侯爵夫人の社交界を好んだ」マクドナルドにラスキが憤慨していたであろうことは想像に難くない。彼は、マクドナルドが「道徳的勇氣」を欠き、職に留まることのみを望んでいると批判するようになる⁽²¹⁾。そして、労働党政府の非力が、支配階級の強大な権力に対する新たな認識を導く。ラスキが、悲観的見通しを持って、支配階級がおとなしく特権を放棄するかどうかという問を発するのは、このよ

うな状況の中でのことである。しかしながら、この時は、議会政治に対する危機が迫っていると警告しながらも、イギリスの長い歴史のある妥協の伝統を持ち出すことでその場を通り抜けるのである⁽²²⁾。

1931年3月、ラスキはニューヨークで「議会政治の衰退」と題する講演を行うが、ここでは彼の人間観に明確な変化が生じている。この講演は、その副題が「独裁はオルターナティブか」であり、議会制民主主義へのラスキの見解が読み取れる。「私は、確信を持った民主主義の信者である。そして、はやらないことかもしれないが、私は民主主義に対する酷評を読めば読むほど、民主主義の弁護論がより明確になるのである。……私は、モスクワのような独裁であろうと、ローマのような単に卑劣な独裁であろうと、独裁によって民主政治を置き換えようとするのは、諸問題を解決する技術に本質的貢献をするとは信じていない。」⁽²³⁾だが、独裁を拒否するだけで問題が解決するわけではない。ラスキ自身、政治権力と経済権力とをどのように適合させるかということで、困難に逢着していることを告白せざるを得ないのである。そして、「人間は完全に理性的な創造物ではない」から、熱情が絡んで、平和の代価は払うに値しないと人々が考えるかもしれない、そういう危険に、我々は直面しているのであるとして、『近代国家における自由』で典型的に示されている人間の理性を全面的に信頼していたラスキの人間観が、修正を余儀なくされていることを示しているのである。しかし、瀕死の議会制民主主義を生き返らせる以外の選択は、ラスキにはあり得ない。そこで、「善意があれば、決意があれば、創意があれば、独創的思想があれば、地獄の縁から引き返し、より良き日への道を見出す見通しがある」⁽²⁴⁾というように、制度的なものばかりではなく、精神的要素に活路を見い出そうとするのである。

1931年7月、すなわち内閣が崩壊する直前に発表された論文「議会の本源」では、政府が、自由党の善意に寄りすぎり政権に留まることに汲々としているがために、逆に、貴族院が、左翼政府の立法の大きな部分を破壊し、その希望を打ち砕くことを元気づけている、として労働党政府を厳しく批判している⁽²⁵⁾。ラスキが憤るのも無理はない。実際、幾つかの重要な法案が貴族院によって葬り去られている。教育相のサー・チャールズ・トレベリアンによって

提出された最終学齢を15歳に引き上げる法案は、1931年2月、貴族院によって否決された。トレベリアンは、法案が敗れたことに対する失望のため、また同じく政府の弱腰に憤慨して辞職した。1927年に制定された同情ストと政治ストを禁止した労働争議法を修正しようとする法案は、庶民院の審議の過程で、自由党の非妥協的態度により大修正され、政府自らそれを廃案にせざるを得なくなった。複数投票や大学選挙区を廃止しようとした選挙法改正案も労働党政府が倒れた時には、既に貴族院で骨抜きにされていた。

労働党政府の主たる失敗は失業問題であった。イギリス経済の病弊は、第一次大戦以来慢性化していたが、1929年秋からの世界恐慌が絶望的な様相をもたらした。失業者数は、労働党が政権についた6月は116万人であったが、1930年に入ると、1月に152万人、7月207万人、そして12月には250万人にも達したのである。政府は「征服しようとしていた失業に征服されたのである。戦後の国際経済の不健全な構造が崩壊し始めたまさにその時に政権を担当したのは、労働党政府の不運であり、それは状況の犠牲であった。」⁽²⁶⁾ マクドナルド内閣は成すところなく押し流され、そして崩壊した。「労働党の人々は、皆自分では『社会主義者』と称していたが、自分たちの役割は、長い間得意になって予言してきた経済の崩壊を歓迎することなのか、あるいは阻止することなのか、決めることができなかった」⁽²⁷⁾のである。

直接の危機は、一般的な失業問題とは無関係に、国外からやってきた。1931年5月、中央ヨーロッパで金融恐慌が発生し、モラトリアムが宣言された。大戦以来シティは、外国貨幣の短期預金を受け入れ、長期の寛大な貸付を行うことにより、国際金融の中心地としての昔日の地位を回復し、中央ヨーロッパの経済生活を復興させようと努力していたのであるが、今、シティの金は、その多くがドイツで凍結されていた、そしてシティへの外国からの預金は、その多くが海外逃避資金で、噂だけで一国の首都から他国の首都へと動いていた。こうした情勢の中で、莫大な財政赤字が生じることを示したメイ報告が1931年7月31日公表され、既に始っていたポンドの取付けを大規模なものにした。イングランド銀行は、フランスとアメリカの銀行から借金を求めたが、その条件は、ポンドの国際的な信用を回復する措置、すなわち均衡予算がとられることであ

った。予算を均衡させるためには、政府支出の削減——失業手当の10%切り下げが含まれていた——が必要であるということが、政府と銀行家、および野党との話し合いの前提となった。内閣は、ポンドの救済には同意したが、スノードンが決意を固めていた失業手当の切り下げは、労働党政府としての原則にかかわる問題であった。ヘンダソン、ランズベリを含む9人の大臣が反対にまわり、内閣はもはや存続できなかつた。マクドナルドは辞表を取りまとめ、大臣たちは、別の内閣、たぶん保守＝自由連立内閣が造られるだろうと想像して散会した。これが8月23日の出来事であった。ところが、翌8月24日、マクドナルドを首相とする挙国政府の成立が発表されたのである。この内閣は「非常事態」を乗り切るために組織されたものであり、わずか10人の閣僚から成っていた。その内訳は、保守党4人、自由党2人、そして労働党4人である。労働党の4人は、マクドナルド、スノードン、トマス、そしてサンキーであった。労働党は野党に戻り、マクドナルドらは裏切り者になった。スノードン蔵相は、歳出削減を断行し予算の均衡を達成したが、それは無駄な努力に終わった。ポンドの取付けの真の原因は、不均衡予算とは関係なく別の所にあったからである。予算と歳出削減法案が議会を通過する前の9月21日、イギリスは金本位制からの離脱を余儀なくされた。そして政局は、総選挙へと動いていく。

4. 危機に対する見解

1931年8月の政治危機の最中、休暇でヨーロッパに滞在していたラスキは、ロンドンからの電報で急遽帰国する。帰国直後ベアトリス・ウェップにあてた手紙には、次のような記述が見られる。

シドニー・ウェップが正しい側にしっかりとついていることは、喜ばしいことです。もちろん私は、そのことを疑ってはいませんが。私たちが実際に支払っているのは、貴族的な体制の代価なのです。そのような体制が、その魅惑の虜となった人々の心と精神を腐敗させるのです⁽²⁸⁾。

ラスキが「正しい側」と言っているのは、ウェップが挙国政府に加わらず労働党に留まったことを指している。ウェップがそうすることを、ラスキは疑っていなかったと言っているが必ずしもそうではあるまい。ウェップは、労働党内

閣の最後の閣議で、失業手当の10%切り下げを支持する側にいたし、彼自身既に貴族の一員に列せられていたからである。それだけに、「喜ばしい」というのは、ラスキの偽らざる感情であろう。

マクドナルドに代って党首に選ばれたヘンダソンと「朝、昼、晩一緒に、言葉に言い表せないくらい忙しく仕事をして」⁽²⁹⁾いたラスキは、総選挙に向かって動き出したイギリス政界の異様な雰囲気を経験を以下のように伝えている。

最もだまされやすい世間を見たいのであれば、庶民院のロビーは、今や理想的な場所です。もし私がヘンダソンに会って、彼は疲れていると言ったら、彼は重病ということになってしまいます。……どんなに荒唐無稽な噂も信じられてしまう状況なのです⁽³⁰⁾。

ラスキが「危機が意味すること」と題する論文を発表するのは、こうした状況の中でのことである。ラスキは、労働党が次の選挙で勝てば、ポンドからの逃避が始まり、国民的な災難を招くということが言われていることを引合いに出して、現在の事態が意味することは、選挙民の多数の支持を得ている政党も、投資家の妨害を恐れてその原則を実行できない、あるいは、金融資本家は、イギリスの議会制度の通常的前提が彼らの不利に作用するならそれを許さない、ということなのだと分析している。こうして彼は、「もし社会主義者が、彼らが信念としている原則の上になたえられる国家を獲得しようと望むなら、それは革命的な手段によってのみ達成される。銀行家が貸付に不可欠とみなしている条件を受け入れることによってマクドナルド氏が語ったことは、事実上、社会主義国家は、資本主義の暴力的破壊なしには建設され得ないということなのだ」⁽³¹⁾という結論を引き出している。そしてラスキは、これはレーニンとマルクスのテーゼであると自ら宣言するのである。漸進主義と、それを支える人間の理性へのラスキの信頼が、第二次労働党政府の足取りと並行して揺らいできたことは、これまで検討してきた通りである。だが、ラスキはこの時点で暴力革命論を受け入れたのであろうか。早急な結論を出す前に、もう少し事態の進展を見てみよう。

総選挙の結果は決定的であった。マクドナルドや自由党は総選挙に反対であったが、保護貿易を一気に実現しようとしていた保守党に押し切られた。挙国

政府を支持する党派は統一の政策を持たず、労働党を非難する点で一致していたにすぎなかった。労働党に対する強力な武器は、恐怖心を呼びさますことであった。そのために、ドイツのインフレーション時のマルク紙幣が選挙演説の場で振りかざされたり、労働党が勝ったら郵便貯金の預金が流用されると示唆されたりしたのである。労働党は、得票を約200万票減らし、議席数は一挙に52議席に転落したのに対して、挙国政府の側は554議席を得た⁽³²⁾。選挙直後、ラスキはホームズ判事に、国民全体がパニック状態に陥り、理性が全く退いてしまった雰囲気を見たと伝えている⁽³³⁾。

ラスキは、12月までに危機に対する彼の見解をまとめ、『危機と憲法—1931年とその後』と題して出版する。このパンフレットは、マクドナルドの行動が、いかにイギリス憲法の持つ意義を破壊したかを検証するものである。まずラスキは、「イギリスの首相は、アメリカの大統領のようにその政策が閣僚との見解の相違によっても影響を受けない指導者ではない」⁽³⁴⁾としたうえで、マクドナルドが、内閣と労働党に何らの相談もしなかったことを強く非難している。そして、イギリス憲法の原則に従うのであれば、マクドナルドがとるべきであった措置は、辞職して労働党の第二人者ヘンダソンを後任に推すか、野党第一党である保守党の党首ポールドウィンに首相として招請するように国王に助言すべきであった、と主張している。また、ラスキは、今回の危機において国王が果たした役割を重視し、「新内閣は宮廷革命から生れた」という見解をとっている。背後に政党を持たないマクドナルドが、本来ならあり得ないのに再び首相として登場してきたという事実が、それを裏付けている。いずれにせよ、マクドナルドのその後の足取りは、「彼は保守党の好意に頼る以外に何の力も持っていない」というラスキの予見を実証することになった。

さて、ラスキはこの危機からどのような教訓を引き出ししているのであろうか。彼は、「人々は投票日に、労働党が政権に復帰することを断固として望まなかった」と述べ、労働党自体にも選挙民から見放される要因があったことを認めている。「労働党は政権についていた時、すでに時代遅れとなっていた自由党の伝統を受け入れることによって延命を図ろうとする誤ちを犯した」⁽³⁵⁾。それゆえ、ラスキが引き出す教訓は、間に合わせの一時凌ぎで資本主義と妥協

することではなく、労働党の哲学の中心的諸原理を実行することが重要なのだというものである。そしてラスキは、労働組合を社会主義の方向に強化していく必要があること、「労働党は、その目的に対するある種の宗教的な熱情を必要とするであろう」⁽³⁶⁾〔傍点は筆者〕ことを強調するのである。この「宗教的な熱情」の強調こそ、1930年代のラスキの議論の源流となるものである。議会制民主主義を信奉していたラスキは、労働党が政権の座につくことで、彼の意図する変革が漸進的になされることを確信していた。だがこの確信は、危機以前に既に揺らぎ始めていた。危機はそれを加速し、その確信自体が誤りであったことをラスキに認識させたのである。しかしながらラスキは、議会制民主主義を放棄するには、あまりにもイギリスの伝統に根差していた。ラスキは、議会制民主主義という前提を動かすことなく社会主義を実現する道を模索し始めるのである。そして彼は、彼の言う「マルクス主義」に活路を見い出そうとするのである。

こうしてみると、先に見た論文「危機が意味すること」の論調が、ラスキの思想の展開から離れていることが明らかとなろう。ラスキが「レーニンとマルクスのテーゼ」と呼ぶこの発言は、むしろ、資本家に対する警告、すなわち、そのような「陰謀」が続けば暴力革命勢力を助長するという警告として出てきたものと見るべきであろう。当時の政界が冷静さを失わせる状況にあったこと、また、マクドナルドへの個人的信頼感が裏切られたことへの怒りも、この論文の論調が激しいものになった要因である。

1924年、総選挙で敗北して第一次労働党政府が倒れた時、ラスキから心のこもった温かい激励の手紙⁽³⁷⁾を受け取ったマクドナルドは、そのラスキによって、ファシストと同列に論じられることになる。1934年の論文「挙国政府の基本前提」の中でラスキはこう書いている。「ソールズベリー卿以来、これほど庶民の怒りに盲目的であった首相はいない。マクドナルドは、ヒトラーやムッソリーニのように、同意による政治に最高の価値を見い出さなくなったかのようである。」⁽³⁸⁾かつて指導的役割を果たした労働党から裏切り者呼ばわりされ、かつての敵対者である保守党の虜となっていたマクドナルドは、健康も衰え、政治力も枯渇し、1935年6月、首相を引退し枢密院議長にまわった。そして同

年11月の総選挙では、彼自身の議席を労働党候補に奪われるのである。その頃マクドナルドは、彼の友人に次のような手紙を書いている。

政治的な労働運動の今日の立場は、全く嘆かわしいものです。……労働党内の唯一の運動は、少数で、学者ぶって、理屈をこねるインテリ階級を特色とする職業的ドグマティズムの運動だけです。……事実の問題として、挙国政府に加わった2、3名の者の方が、反対党の労働党より、社会主義の思想と方策を前進させたのです⁽³⁹⁾。

この手紙の中で「社会主義」という言葉を使っていること自体、マクドナルドが自分の行為が持つ意味を理解していなかったことを示している。彼は、自分を非難する者を恨みながら、政治的孤立の中で残り少ない余生を送る。

むすび

第二次労働党政府発足当初、内閣およびマクドナルドにかけていた大きな期待は、即座に失望に取って代られた。ラスキが見い出したものは、労働党が内閣を組織しても一向に変らないイギリスの階級構造、自分たちの利益のためには議会制民主主義すら侵害しようとするシティの資本家集団の姿であり、それをただ傍観しているだけのマクドナルド内閣の姿であった。同時に、政治の舞台裏で、パレスチナ問題等の解決の困難な問題に関与することで、人間の理性を全面的に信頼する彼の人間観が内面から揺らいでくる。1931年の危機は、漸進主義放棄に向かうラスキの思想展開を決定づける事件であった。1930年代、ラスキは、議会制民主主義が危機に瀕していると繰り返し警告し、「労働党をマルクス主義政党に」することでそれを打解しようとするのであるが、この議論は、第二次労働党政府の経験に根差すものである。特殊な意味内容を持つラスキの「マルクス主義」も本稿の議論をふまえて初めて理解が可能になるのである。

(注)

(1) 'England in 1929' *The Yale Review*, March 1929, p. 418.

(2) *Holmes-Laski Letters 1916-1935*, ed. by Mark Dewolf Howe, Harvard University Press, 1953, p. 1151.(21 May 1929).

- (3) 保守党は260議席, 自由党は59議席。前回(1924年)の総選挙の結果は, 保守党419, 労働党151, 自由党40であった。
- (4) H. Laski to G. Lansbury, 8 June 1929, Lansbury Collection, British Library of Political and Economic Science, London.
- (5) この人物は, LSE で経済学の講師をしていたヒュー・ドールトンである。彼は, 30年代後半, 労働党全国執行部右派の中心人物となり, ラスキと対立することになる。
- (6) *Holmes-Laski Letters*, p. 1155.(11 June 1929).
- (7) 'The New Test for British Labour', *Foreign Affairs*, October 1929, p. 70.
- (8) *Holmes-Laski Letters*. p. 1213.(28 Dec. 1929)
- (9) *Ibid.*, p. 1170.(2 Aug. 1929)
- (10) S. Pankhurst to Mrs. Laski,(日付不明), Laski papers, Hull University.
- (11) *Holmes-Laski Letters*, p. 1206.(9 Dec. 1929).
- (12) A. J. P. テイラー, 『イギリス現代史 I』, 都築忠七訳, 1968年, pp. 249-250.
- (13) B. Locker to Mrs. Laski, 10 Dec. 1951, Laski Papers, International Institute of Social History, Amsterdam.
- (14) H. Laski to A. Henderson, 5 Jan. 1931, Henderson Papers, Public Record Office, London.
- (15) A. J. P. テイラー, 前掲, p. 250.
- (16) フェリックス・フランクフルターは, ハーバード大学教授。ブランダイスは, 最高裁判事。両者ともアメリカのユダヤ人ロビーの中心的人物でラスキの親しい友人である。
- (17) *Holmes-Laski Letters*, p. 1296.(22 Nov. 1930)
- (18) 'Aristocracy Still the Ruling Class in England', *Current History*, July 1930, p. 666.
- (19) *Ibid.*, p. 671.
- (20) *Ibid.*, p. 670.
- (21) Kingsley Martin, *Harold Laski*, Jonathan Cape Paperback, London, 1969, p. 72.
- (22) 'The Prospects of Constitutional Government', *The Political Quarterly*, July-Sep. 1930.
- (23) *The Decline of Parliamentary Government*, Foreign Policy Association, New York, 1931, pp. 7-8.
- (24) *Ibid.*, p. 12.
- (25) 'The Mother of Parliaments', *Foreign Affairs*, July 1931, p. 570.
- (26) C.L. Mowat, *Britain Between the Wars*, University Paperback, Cam-

- bridge, 1968, p. 357.
- (27) M. Muggeridge, *The Thirties in Great Britain*, London, 1940, p. 53.
- (28) H. Laski to B. Webb, 5 Sep. 1931, Passfield Papers, British Library of Political and Economic Science, London.
- (29) *Holmes-Laski Letters*, p.1329.(17 Sep. 1931).
- (30) *Ibid.*, p. 1332.(27 Sep. 1931)
- (31) 'On Some Implications of the Crisis, *The Political Quarterly*, 1931, p. 467.
- (32) 拳国政府支持派の内訳は、保守党 473, 拳国派自由党 35, 自由党33, 拳国派労働党13であった。
- (33) *Holmes-Laski Letters*. p. 1334.(30 Oct. 1931).
- (34) *The Crisis and the Constitution: 1931 and After*, London, 1932, p. 12.
- (35) *Ibid.*, p. 42.
- (36) *Ibid.*, p. 55.
- (37) H. Laski to J.R. MacDonald, 1 Nov. 1924, MacDonald Papers, Public Record Office, London.
- (38) 'The Underlying Assumptions of the National Government', *The Political Quarterly*, Jan.-Mar. 1934, p. 16.
- (39) J. R. MacDonald to Percy Redfern, 27 Nov. 1935, Percy Redfern Collection, Manchester Central Library.

(筆者の住所：〒186 国立市東2-4 一橋大学院生寮)